りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする個別の指導や支援を行うための最適任者は学級担任であろう。学級の児童と共に過ごす時間が長いことに加え，一人一人の家庭環境までを視野に収め，それぞれの将来の展望などにも即せるからこそ，機を逸せずに言葉をかけることができる。また，学級担任は，個々の児童の普段の行動，言葉の選び方，表情などを熟知し，その子の微細な変化に気付くことができるからこそ，その子に最もふさわしいキャリア・カウンセリングが提供できると言えよう。そして，これらの日常的な場面でのコミュニケーション(対話)が基盤となって，必要に応じて特に時間を設定して実践する対話(二者面談等)も円滑に進むのである。

このような重要な役割を担うゆえに，児童や保護者等とのコミュニケーションのスキルなど，カウンセリングの基礎的な能力・態度・技能を習得するための研修はすべての教師にとって重要であるし，各学校でキャリア教育を推進するための中心的な役割を果たす教師は，カウンセリングの技法，キャリア発達，職業や産業社会等に関する専門的な知識や技能など，キャリア・カウンセリングの専門性を身に付けるための研修にも積極的に参加する必要がある。

小学校でのキャリア教育の取組において，学級や学年などの集団の場面で実践するガイダンスと，個々の児童との対話を通して行うカウンセリングは，その推進の両輪となるものと言えよう。

⑤ 何が身に付いたか ―評価の充実―

キャリア教育を推進・充実させていく上で，評価は重要である。「評価が重要である」ことを感じる一方で，多くの教師が評価について悩んでいることがうかがえる。評価には，児童の現状や学びの成果を把握する「見取り」と，見取りの結果や全校的な教育活動の実施状況を把握する「点検」の二つの側面がある。児童が必要な力を身に付けられたのかを把握すること，全校的な教育活動を把握すること，いずれも，次の取組を改善するためには重要なことであるが，ここでは，児童に必要な力に関する「見取り」に焦点化したい。キャリア教育は，「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す教育」である。キャリア教育の推進に当たっては，まず，児童のスタート地点，今(現状)を的確に把握することが求められる。児童の現状を把握せずして，変容を見取り，児童自身も教師も成長を実感できるキャリア教育としていくことは難しいであろう。

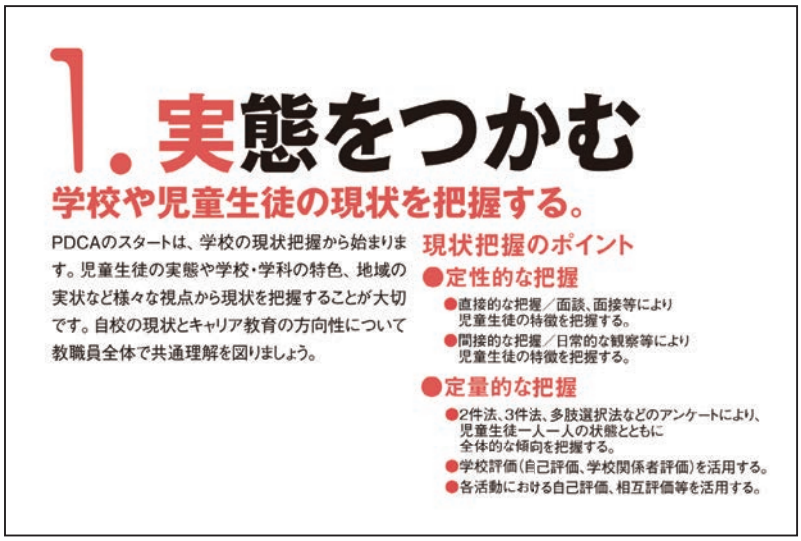
しかし 重要性を感じる一方で，先生方はキャリア教育の「評価の仕方」に悩んでいます。

先生方にとって「評価の仕方」は，「キャリア教育を実施する十分な時間の確保」に次ぐ悩みとなっています。

学級等のキャリア教育について困ったり悩んだりしていること(第一次報告書P86, P153, P262)

小学校		中学校		高等学校	
1位 (40.1%)	キャリア教育を実施する十分な時間の確保	1位 (35.4%)	キャリア教育を実施する十分な時間の確保	1位 (34.6%)	キャリア教育を実施する十分な時間の確保
2位 (37.4%)	キャリア・カウンセリングの内容・方法がわからない	2位 (34.9%)	**キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない**	2位 (31.0%)	**キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない**
3位 (33.2%)	**キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない**	3位 (33.3%)	保護者のキャリア教育に対する期待が進路先の選択やその合格可能性に偏っている	3位 (26.1%)	キャリア教育の適切な教材が得られない
⋮		⋮		⋮	
14位		18位		18位	

それでは，児童の現状を把握するためには，どうすればよいのだろうか。現状を把握するポイントとしては，定量的な把握と定性的な把握が考えられる。定量的な把握としては，アンケートにより，一人一人の状況や学級，学年，学校，校区といった単位で全体的な傾向を把握することや，児童自身の自己評価や児童同士の相互評価を活用することも考えられる。学習の振り返り，学校生活に関する様々なアンケートの活用も可能であろう。定性的な把握としては，児童との日常的な対話や面談等を通して，直接的に行うものがあげられる。「どんな1年にしたいと思っているのかな？」「1学期にできるようになりたいことは？」「〇〇の行事で，自分でできるようになったことやもう少しがんばりたかったことは何？」など，教師は様々な対話や働きかけを日々行っているのではないだろうか。



平成23年「キャリア教育を創る」より

このように新しい取組として実施するばかりではなく，各学校で既に行っている，アンケートなどについて，意味を再確認し，活用していく視点も重要である。児童の現状を具体的に把握することで，目指すべき姿との差が明らかになり，その差を埋めるために必要な指導計画についても自ずと明らかになる。

次に，児童の自己評価や教師による児童理解を深めるために活用することが期待される「キャリア・パスポート」について，改めてその価値を確認したい。児童は，日々の様々な学習や経験を通して，変容，成長している。学校には，児童の成長する場面が散りばめられており，教師が前述のキャリア・カウンセリングなどを通して，成長を促したり，成長の場面に立ち合ったりすることも多いのではないだろうか。一方で，学校教育全体を通じて，多くの成長の場面があるがゆえに，意識的に学習や活動の様子，振り返りを記録していくことが求められる。学習や成長の記録を一元化したポートフォリオに蓄積された児童の活動記録や気付きなどは，教師が児童を見取るための重要な資料となり得る。また，何より，児童自身が自分の成長を実感するための貴重な資料となる。

「キャリア・パスポート」は，学習指導要領及び中央教育審議会答申で次のように述べられており，有効に活用することで，多様な側面から児童の学びを捉えることができる。

●学習指導要領特別活動第２〔学級活動・ホームルーム活動〕３内容の取扱い
学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の（在り方）生き方を考えたりする活動を行うこと。その際，児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。
●中央教育審議会答申 平成 28 年 12 月 21 日
子供一人一人が，自らの学習状況やキャリア形成を見通したり，振り返ったりできるようにすることが重要である。

「キャリア・パスポート」を活用した評価については，国立教育政策研究所「キャリア教育リーフレットシリーズ特別編キャリア・パスポート特別編１～３(平成30年５月)」(本書P.31にQR CODE)も参考にしていただきたい。例えば，「大舘ふるさとキャリア教育」では，各校の日常の中で行われる各教科等の授業やファイルへの活動記録のまとめ等を振り返る。ここでのポイントは，「日々の授業の中で培った振り返る力を生かしている」という点である。「キャリア・パスポート」に関わる取組を学期末や年度末に１時間だけ使って書かせて終わりといった形ではなく，各教科等を通じて行っている自分の考えを振り返ることや表現する機会を活用しているのである。もし，ある児童が「今日の国語では，友達の意見を聞いて自分が気付いていない主人公の気持ちがあることが分かり，この物語をもう一度読み直してみたいと思った」と振り返りを書いた場合，教師は何を見取ればよいだろうか。異なる他者の意見に触れ，視野を広げられたこと，更なる学習意欲を高めたことについて，価値付け(評価)することで，児童自身が自分の成長を実感できる場面となっていくのではないだろうか。

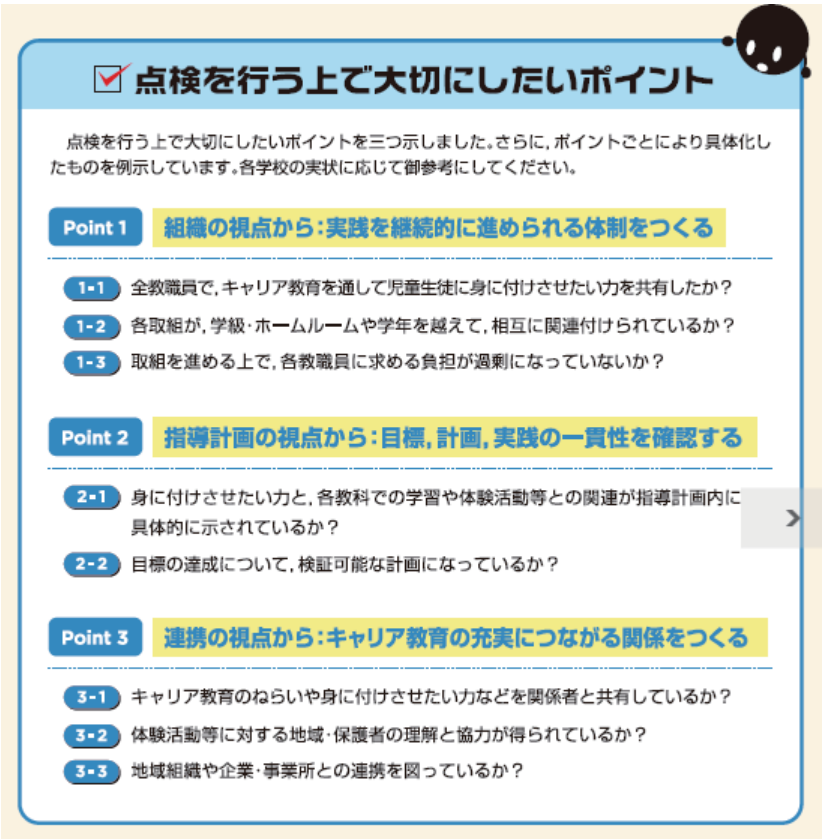
次に，「キャリア・パスポート(例示資料)」を活用した評価についても考えてみたい。例えば，「○年生のみなさんへ」では，「キャリア・パスポート」の意味や活用方法，教師から児童への願いや期待を伝える欄がある。「キャリア・パスポート」は，児童自身の学びの軌跡を蓄積するものであり，年間を通してどのように活用するのか，何を目標に学習し，学校生活を送っていくのか，児童と教師が共有することができる。行事や学年末の振り返りの際にも活用できるよう例示されている。例えば，「なりたい自分にどれだけ近付けたか」では，「できるようになるために行動した自分」に気付かせることや，自身が気付いていない“がんばり”を認め，肯定的に捉えられるような支援(評価)を行うことで，更なる意欲や成長，自己肯定感の醸成につなげていくこともできる。ぜひ，各学校の児童の実態に合わせて，よりよい成長につながる活用を進めていただきたい。そして，さらには，取組の点検・改善にもつなげていただきたい。また，小学校特別活動評価資料(令和２年６月27日　国立教育政策研究所)において「キャリア･パスポート」を活用した指導案例や学級活動(3)の指導と評価の工夫を示しているので，参照していただきたい。

⑥ 実施するために何が必要か ―人的・物的な体制の確保―

キャリア教育の推進に当たっては，校内体制の整備と併せて，校種間連携を含む学校間連携，また，家庭や地域，企業等実社会との連携も重要である。これらは，教育課程を編成する上で求められる，カリキュラム・マネジメントの三つの側面のうちの一つである「教育内容と，教育活動に必要な人的・物的資源等を，地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。」の要素でもあり，各学校が，校内外の人的・物的資源を最大限生かしたキャリア教育を進めていくことが求められる(学習指導要領における記載についてはP.70参照)。カリキュラム・マネジメントの視点で，教育活動の質を高めていく営みは，各学校が，児童の実態を把握し，一人一人のキャリア発達を願い，キャリア教育を構想し，推進していく営みと同じである。

それでは，各学校では，どのように校内組織を整備し，キャリア教育を実施していけばよいのだろうか。キャリア教育は，教育課程全体を通じて行うものであり，担任一人で行うものではない。小学校６年間の縦の接続の中で，各学年においてどのような力を育むのか，とりわけ，小学校は６年間という長いスパンで児童の教育に当たることから，児童の発達段階に合わせて，長期的な視点による多様なキャリア教育を実施することが求められる。６年間でどのような内容の学習を実施するのか，地域等の資源

については，どのように計画的に活用するのか調整することも必要となる。目の前の児童の前年度までの学習状況やキャリア教育における経験を把握すること，また，次年度以降の学習とのつながりや見通しについても把握することで，学びと学び，経験や活動と成長がつながり，より効果的なキャリア教育となっていく。



点検を行う上で大切にしたいポイント

点検を行う上で大切にしたいポイントを三つ示しました。さらに，ポイントごとにより具体化したものを例示しています。各学校の実状に応じて御参考にしてください。

Point 1　組織の視点から：実践を継続的に進められる体制をつくる

1-1　全教職員で，キャリア教育を通して児童生徒に身に付けさせたい力を共有したか？
1-2　各取組が，学級・ホームルームや学年を越えて，相互に関連付けられているか？
1-3　取組を進める上で，各教職員に求める負担が過剰になっていないか？

Point 2　指導計画の視点から：目標，計画，実践の一貫性を確認する

2-1　身に付けさせたい力と，各教科での学習や体験活動等との関連が指導計画内に具体的に示されているか？
2-2　目標の達成について，検証可能な計画になっているか？

Point 3　連携の視点から：キャリア教育の充実につながる関係をつくる

3-1　キャリア教育のねらいや身に付けさせたい力などを関係者と共有しているか？
3-2　体験活動等に対する地域・保護者の理解と協力が得られているか？
3-3　地域組織や企業・事業所との連携を図っているか？

また，実際の授業に当たっては，例えば，児童の安全確保一つをとっても，学級，学年を越えた体制の確保が必要であることはもちろん，キャリア教育は，児童が，社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てるものであるため，実社会と学校教育をつなぐものとしていくためにも，家庭や地域の協力や理解を得るための体制も必要となる。学級や学年だけでなく，管理職を含めた学校全体の連携推進組織や役割分担が必要となる。また，キャリア教育の全体像を示す「キャリア教育全体計画」を作成している学校は多くあるが，その作成に一人一人の教職員が参画意識をもてているか，日常の取組とリンクし，活用できるものとなっているかについては，課題もあるのではないだろうか。一部の担当者だけが作成し，その存在をかろうじて知っているという状況では，実際は活用されないままとなってしまう。初めから整っていなくても，「わが校の児童の実態は○○である。だから，○○の力をつけるために，○○学習を行う」という教職員や児童自身の願いをスタートに全教職員，更には，児童や保護者，地域とも共有できるよう定期的に見直し，改善していくと，生きた「全体計画」となっていく。

組織としては，既に，「キャリア教育推進委員会(名称は各校による)」などがある場合や，新しく推進組織を立ち上げる方法もあるだろう。一方で，組織の名称に関わらず，各校で，教育内容を検討したり，調整したりする組織が既にあるのではないだろうか。様々な「○○教育」に対して，それぞれ別の組織や会議を増やしていくのではなく，既存の組織を活用した取組の実施や点検を行う方法も検討していただきたい。国立教育政策研究所「子供たちの『見取り』と教育活動の『点検』(平成27年3月)」(本書P.60にQR CODE)では，学校教育全体の改善につなげていく視点で，キャリア教育の点検を行う視点が示されており，参考にしていただきたい。

学校間連携については，校種が変わっても，児童の成長は連続していることから，就学前教育と小学校，小学校と中学校など，その重要性は認識されているところである。一方で，学校文化も，時間的なリズムも異なることから，無理なく，意図的・計画的に連携を進める必要がある。就学前教育と小学校の児

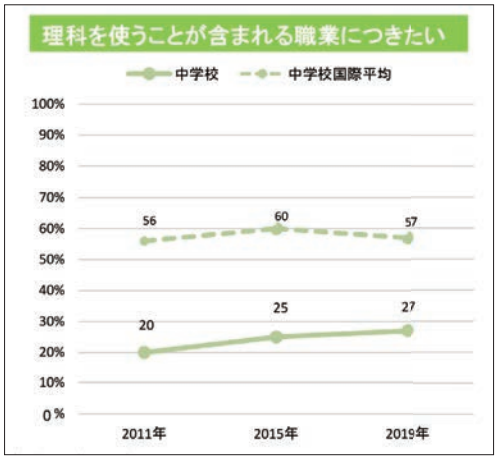
童同士の交流を例に見ると，就学前の児童にとって，小学生との交流は「近い将来」を感じる機会であり，「あんなお姉さん，お兄さんになりたい」，「あんなことをできるようになりたい」など小学校生活への期待や希望をもてる機会となる。小学生にとっては，下学年の児童への思いやりなどの心情や自己肯定感が育まれるとともに，自分の成長を実感できる機会となる。このように，交流の目的や成果を双方の教職員が共有し，どちらかに無理がかかり過ぎるといったことがないよう実施していくことが重要である。

家庭や地域，企業など地域社会との連携では，改めて自分の学校・校区にある資源を知り，十分に生かしていく視点が重要となる。「地元に愛されている商店街がある」，「新しい時代に合わせて変化してきた街並みがある」，「歴史的な建造物がある」，「地域のためにこんな活動をしている人がいる」など，各学校には，キャリア教育を実施する上での資源＝「宝」があるはずである。地域社会と連携したキャリア教育は，自分の住む地域に誇りをもつことや，よりよくしていきたいとの社会参画意識が醸成されることにもつながる。自分が育った地域，住んでいる地域を大切に思うことは，自分自身を大切に思い，肯定していくことにもつながる。また，「○○を仕事にしている方でお話をしていただける人がいる」，「○○さんは，こんな経験をもっているので，ぜひ子供たちに出会わせたい」，「“仕事”という視点で“教師”についてインタビューを受けてもらいたい」など，「人」そのものが実社会と学校教育をつなぐ魅力的な「宝」となる場合もある。これらの学習は，事前の準備や調整が必要であり，特に外部の資源を活用する際には，丁寧な依頼や目的の共有が必要となる。担当の教職員の負担や，引き受けてくださる人や施設の負担が大きすぎると，なんとか１回は実施できたとしても，継続的に取り組んでいくことは難しい。体制が不十分なことにより，安全上の課題が生じることも避けなければならない。学校全体で，実施可能な内容や時期を十分検討し，体制を確保した上で，無理なく，無駄なく，キャリア教育を推進することが重要である。

魅力的なキャリア教育の実施により，児童の成長につながることが学校や保護者の願いであることは言うまでもない。また，協力してくださる地域や企業などにとっても，児童の成長は喜びであり，地域の活性化にもつながるものである。校内体制の整備と多様な連携により，学校・地域社会の資源を最大限生かしたキャリア教育を進めていただきたい。

（３）教科等におけるキャリア教育実践の基本

ここでは，小学校段階におけるキャリア教育を実践するに当たり，各教科等それぞれ留意すべきことについて確認する。教科等の学びと学び，また，実社会とをキャリア教育の視点で「つなぐ」ことで教育効果を高めることができる。



① 教科

学校における１日の多くの時間は教科の学習である。教科において，どのようにキャリア教育の視点を取り入れた学習を実践していけるかは，児童の成長にとって大変重要である。従前から，日本の児童の課題として，学ぶ意義が感じられていない，自分の将来と学習をつなげられていな

いといった実態が明らかになっている。最も多くの時間を使って日々学習をしているはずであるのに，何が問題なのであろうか。学習指導要領改訂に向けた中央教育審議会答申では，

・学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら，自らの能力を引き出し，学習したことを活用して，生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力には，課題があることが分かる。
・学校で学ぶことと社会との接続を意識し，一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み，キャリア発達を促すキャリア教育の視点も重要である。

学習指導要領　総則　第４児童の発達の支援(3)　では，

児童が，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること。

とされている。教科には，教科の本質があり，各教科等の学習を通じて育みたい資質･能力がある。キャリア教育の視点を取り入れようとするあまり，授業の核となる教科等で目指すべき力の獲得が曖昧になることは避けなければならない。また，キャリア教育の視点を教科に「ON」するという捉え方も，混乱を招く側面があるのではないだろうか。例えば，単元のねらいを達成するための授業展開の中には，そもそもキャリア教育の意味や価値が存在するものがある。「実社会に役に立っていることをこの単元では伝えられる」「〇〇の職業で活用されている考え方である」「今日学んだことは，実は，生活のこの場面で使用されている」「この実験で確かめたことは，今や未来の社会とつながる技術である」など，授業者がその価値に気付き，意識して授業ができるかは大きい。授業者が学ぶ価値を見いだせていない状態では，児童が学ぶ意味や価値を実感することは難しい。また，主体的・対話的で深い学びの実現には，自分で考えたり表現したりする場面，多様な人と対話し，協働するために，「人間関係形成能力」を育むような学習過程が日常的に取り入れられているはずである。この学習過程そのものに着目することもできる。

② 道徳科

「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)(平成26年10月)」では，基本的な考え方として，「一人一人のよさを伸ばし，成長を促すための評価を充実すること」と示された。特別の教科　道徳(以下,「道徳科」という。)の目標は，教育課程全体を通じて,「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」ことであり，より一層キャリア教育の視点を生かした学習の展開が期待される。道徳科の目標を達成するために指導すべき内容項目として，四つの視点「A　主として自分自身に関すること」「B　主として人との関わりに関すること」「C　主として集団や社会との関わりに関すること」「D　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること」で学年段階に分けて整理されており，いずれも，キャリア教育との関連が深い内容である。学年段階ごとに示されている内容項目の指導の観点では，例えば，

A　主として自分自身に関すること
希望と勇気，努力と強い意志
〔第１学年及び第２学年〕
自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと。
〔第３学年及び第４学年〕
自分でやろうと決めた目標に向かって，強い意志をもち，粘り強くやり抜くこと。
〔第５学年及び第６学年〕
より高い目標を立て，希望と勇気をもち，困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと。

と示されている。これらは，キャリア教育における「夢」の実現に向けた努力や，「仕事」について，ゲストティーチャーからの聞き取り学習で学んだことなどと関連させることで，道徳科としてもキャリア教育としても効果を高めることができる。他にも「個性の尊重」では，「自分のよさや特徴を知って，伸ばすこと」が示されており，自分の役割を果たしながらキャリア発達を促すキャリア教育と関連は深い。B　主として人との関わりに関すること「感謝」では，自分たちの生活が，多くの人々に支えられ助けられて成り立っていることへの気付きが，自分も人々や公共のために役に立とうとする心情や態度につながるよう指導を深めていくことが求められており，各校における「家の仕事調べ」や「学校でみんなを支えている仕事や役割」などについて学ぶキャリア教育と関連を図ることができる。

C　主として集団や社会との関わりに関すること
勤労，公共の精神
〔第１学年及び第２学年〕
働くことのよさを知り，みんなのために働くこと。
〔第３学年及び第４学年〕
働くことの大切さを知り，進んでみんなのために働くこと。
〔第５学年及び第６学年〕
働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに，その意義を理解し，公共のために役に立つことをすること。

は，言うまでもないが，仕事に対して誇りや喜びをもち，働くことの意義を自覚し，進んで公共のために役立つことに関する内容項目である。児童一人一人が働く意義や目的を探究し，みんなのために働くことの意義を理解し，集団の一員として自分の役割を積極的に果たそうとする態度を育成することが望まれており，キャリア教育と関連を図ることで，より効果を高められる。

③ 総合的な学習の時間

総合的な学習の時間の目標は，探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指すことである。小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編では，今回の改訂の基本的な考え方として，「探究的な学習の過程を一層重視し，各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け，実社会・実生活において活用できるものとするとともに，各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成する。」とされている。総合的な学習の時間で育成することを目指す資質・能力として，

(1) 探究的な学習の過程において，課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け，課題に関わる概念を形成し，探究的な学習のよさを理解するようにする。
(2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て，情報を集め，整理・分析して，まとめ・表現することができるようにする。
(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

が3つの柱として示されている。

キャリア教育が，一人一人のキャリア発達や，仕事などの視点から，学校の学びと実社会や実生活をつなぐ役割を担うものであると考えたとき，総合的な学習の時間においても，同様のことが求められており，キャリア教育と総合的な学習の時間には密接な関わりがあることが分かる。

例えば，総合的な学習の時間において，「自分の住む地域に関心をもち，調べたいことを考え探究する中で，地域のよさや，働く人の思いを知り，地域が人々の願いを実現しようとする社会参画により，つくられていることを理解する」といった学習を展開している学校は多いのではないだろうか。身近な地域の方の話を聞く中で，働くことの大変さや尊さに気付いたり，ボランティア活動で得られるものについて教えてもらったりする場面がある。また，地域をよりよくしようとしている人に出会うことで，社会参画の大切さに気付くこともある。これらは，「課題対応能力」や「キャリアプランニング能力」など，キャリア教育で育みたい資質・能力(基礎的・汎用的能力)と関連が深く，キャリア教育の視点で進められる学習例である。

また，総合的な学習の時間では，課題の解決において，主体的に取り組むこと，協働的に取り組むことが重要とされている。児童がこれから生きていく社会は複雑で多様である。予測できない困難な課題や一人では解決できない課題も多いだろう。だからこそ，多様な他者と協働的に学ぶことが求められているのである。学校における同学年の児童だけでなく，異学年の児童，地域や企業の方などとの出会いや協働も総合的な学習の時間の学習過程では多いことが想定される。

さらに，総合的な学習の時間は，各学校において定める目標や内容，育成を目指す資質・能力を設定することが求められている。これは，P.70「① 何ができるようになるか―具体の能力設定のポイント―」にて前掲の目の前の児童の実態にふさわしいキャリア教育を通して身に付けさせたい力の設定と同様である。児童に育みたい力があり，そのための内容があるはずである。

総合的な学習の時間は，「自己の生き方を考えていくための資質･能力を育成する」学習である。ぜひ，キャリア教育と関連を図りながら，児童の人生がより豊かなものとなるよう各校で知恵を寄せ，各校の資源を最大限生かしながら魅力的な学習を展開していただきたい。

④ 特別活動

学習指導要領(平成29年告示)では，特別活動の学級活動を，キャリア教育の「要」とすることが示された。その背景等は，本書P.71にも示しているが，これまで，学校の教育活動全体を通じて行うキャリア教育の性質上，意図すれば，いずれの教科等でもキャリア教育となり得ることにより，何でもキャリア教育，もしくは，何がキャリア教育なのか分かりにくいといった疑問に対して明確に応えるものとなった。

キャリア教育の「要」としての特別活動に新設された学級活動の内容(3)「一人一人のキャリア形成

と自己実現」「ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成」「イ 社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解」「ウ 主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用」は，小学校におけるキャリア教育推進の拠り所となるであろう。

●小学校学習指導要領特別活動第２〔学級活動〕３内容の取扱い

> 学校，家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て，学んだことを振り返りながら，新たな学習や生活への意欲につなげたり，将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際，児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。

キャリア教育の各場面において，学習や活動の内容を記録し，振り返るには，教師にとっても，児童にとっても意義があることはこれまでも述べてきた。中学校，高等学校へと，これから児童が成長していく過程の基礎となる小学校段階における効果的な「キャリア・パスポート」の活用は，大変重要なものとなる。

小学校の強みの１つは，担任が多くの教科等で児童を指導するなど，教育課程全般に関わっていることである。その強みを生かして，各教科等のほか，学校行事や学校生活における節目で児童が記載する振り返りなど，これまでも取り組んでいる児童の学びや成長の記録を生かしながら，特別活動を要にした「キャリア・パスポート」の取組を推進することが可能である。学級活動の時間に，「キャリア・パスポート」を活用する際には，学級活動の目標や実施時間数にふさわしいものとなるように留意することも必要である。児童への負担にも配慮し，書くことを目的に多くの時間を費やすことや，学級活動の時間内に個別の面談等を行うことは適切ではない。「キャリア・パスポート」を書くことで終わるのではなく，活用して話合い活動を行うことや，意思決定を行うなど，学習過程を重要視することが求められる。

板橋区立中台小学校

具体的には，例えば，学級活動(3)で「キャリア・パスポート」を活用して「なりたい自分」を考える学習などが考えられる。これから高学年になろうとする4年生が，これまでお世話になった高学年の先輩が自分たちにしてくれていることを思い起こし，5年生に向けて「なりたい自分」について話し合い，各々の目標を考えることや，そのために今からできることを具体的に考え，実行する計画を立てるといった学習も考えられる。このように，夢や職業調べなど「キャリア教育」の固定的なイメージの強い学習のみをもって終わるのではなく，一人一人のキャリア形成と自己実現に向け，経験や学びについて，話し合い，記録・蓄積することで可視化し，よりよいキャリア形成につなげていける特別活動を展開したい。

国立教育政策研究所「キャリア教育が促す『学習意欲』」についてはこちらのQR CODEから。
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/career-report_pamphlet.htm

学級活動(3)の指導と評価の工夫やキャリア教育の充実を図る特別活動の実践については，「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」を参照してください。
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html

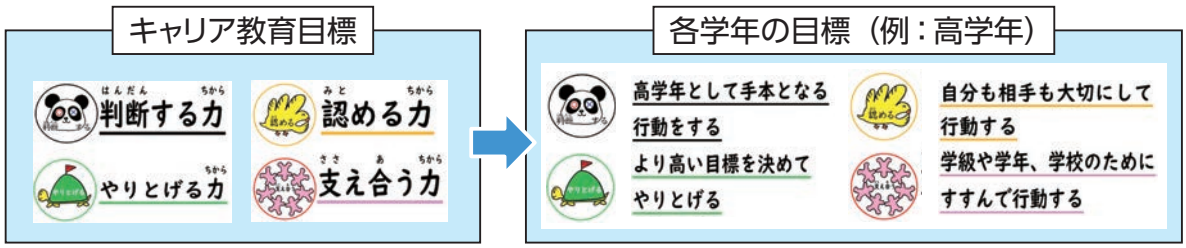
【事例2】東京都世田谷区立尾山台小学校
常に取組を見直し改善する学校づくり

常に児童の実態を踏まえ取組を改善し続け，四つの「付けたい力」を基に，年間指導計画の作成，それを基にしたキャリア教育の推進を行っている。

【学校について】

東京都世田谷区の南に位置し，尾山台駅前に広がる活気ある商店街の近くにある小学校。近くに尾山台中学校が位置し，玉堤小学校とともに３校で翠と溪の学び舎として連携を図っている。児童数は約530人で学区外から登校する児童も多い。本校には，通常学級，知的固定学級（けやき学級）があり，情緒通級学級（すまいるルーム）の拠点校ともなっていて教師数や講師数が多い。学校運営サポーターも活躍し，６年生「For the future」や３年生「商店街調べ」など活気ある商店街や地域の人材，大学などと連携した取組みが行われている。

【キャリア教育の目標】（令和２年度版）



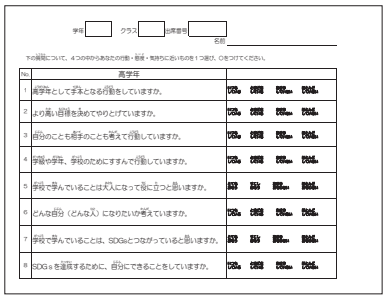
【児童の実態把握】

・研究アンケート（教師）

毎年，年度末に教師向けの研究に関する年度末反省を行っている。個人評価，分科会評価をそれぞれ行い，その結果を研究推進委員会で検討し，研究全体会で共有している。

・研究アンケート（児童）

取組の成果と課題を検証するために，年２回全学年の児童対象に研究に関する自己評価のアンケートを実施している。その中には，尾山台小学校のキャリア教育目標の振り返りや，その年に力を入れている取組に関する項目を入れている。



学年＿＿　クラス＿＿　出席番号＿＿
名前＿＿＿＿＿＿＿＿

下の質問について，４つの中からあなたの行動・態度・気持ちにおいものを１つ選び，○をつけてください。

No.	高学年	
1	高学年として手本となる行動をしていますか。	○をつけてください。
2	より高い目標を決めてやりとげていますか。	○をつけてください。
3	自分のことも相手のことも考えて行動していますか。	○をつけてください。
4	学級や学年、学校のためにすすんで行動していますか。	○をつけてください。
5	学校で学んでいることは大人になって役に立つと思いますか。	○をつけてください。
6	どんな自分（どんな大人）になりたいか考えていますか。	○をつけてください。
7	学校で学んでいることは、SDGsとつながっていると思いますか。	○をつけてください。
8	SDGsを達成するために、自分にできることをしていますか。	○をつけてください。

・その他（学習効果測定，体力測定など）

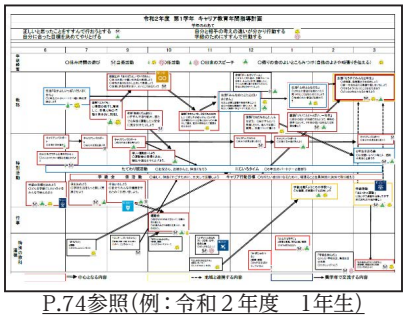
【研究のあゆみ】

平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	令和２年度
土台づくり		振り返り活動の充実		キャリア教育目標の見直し	
キャリア教育研究スタート キャリア教育目標の設定 年間指導計画作成	授業研究 ＰＤＣＡサイクルによる年間指導計画の見直し	振り返りカード キャリアン・パスポートの作成	学活と道徳を中心とした実践 おやまちプロジェクト	キャリア教育目標の具体目標の見直し 学活を中心とした実践 一人一実践	キャリア教育目標の四つの力の見直し SDGs の推進

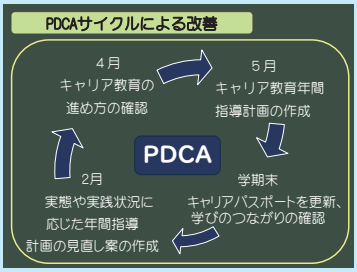
【実践紹介】

・児童の実態を基にした目標の設定と年間指導計画

児童の実態把握を基に，毎年キャリア教育目標や年間指導計画の見直しを行っている。



P.74参照(例：令和２年度　1年生)



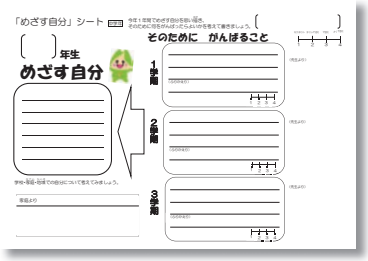
本校では，旧担任による見直し，新担任による修正により，毎年，キャリア年間指導計画を更新している。

・キャリアン・パスポート(「キャリア・パスポート」)をはじめとした振り返り活動

行事，中心となる活動の成果物など各学年でキャリアン・パスポートにとじるものを共通理解し精選している。どの活動の振り返りに関しても教師のキャリア・カウンセリング的な関わりを大切にコメントをしている。年度末には保護者の方にもコメントを記入してもらい，家庭と連携して児童の自己肯定感を高める取組を行っている。

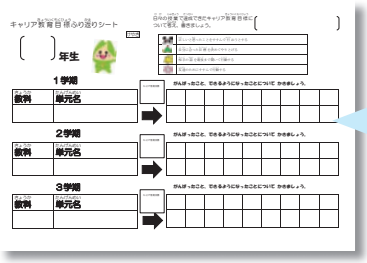
【めざす自分シート】

学級活動（3）の時間に「めざす自分」について考えたり，立てためあてを振り返ったりする活動をしている。



(例：中学年)

【教科をつなげるシート】



学級活動を要として各教科の学びをつなげることを目的とし，活用しているシート。学期末に学級活動（3）で活用。

【振り返りカード】

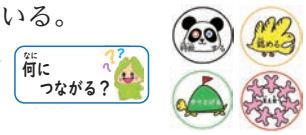
(例：６年生)

各学年の実態に合わせたカードを使用。

・キャリア教育目標を意識づけるための掲示物

児童と教職員がキャリア教育目標や年間の学習の流れを意識するために①各学年の教育目標(教室の黒板上)②６年間のキャリア教育目標(教室内の掲示板)③各学年のキャリア教育目標年間指導計画(各学年の廊下掲示板)の３点を各教室や廊下に掲示している。

授業で活用するためのマグネットシート。



６年間の目標のつながりを感じさせるための掲示物。

【事例3】（大阪府）高槻市立第四中学校区ゆめみらい学園
高槻市立富田小学校・赤大路小学校・第四中学校
小小連携，小中連携により，キャリア教育の効果を高める取組

校区の児童の実態を踏まえて「付けたい力」を設定。校種間連携，家庭・地域・社会との連携・協働により「付けたい力」を育む教育課程を編成し，キャリア教育を展開。

【校区について】

大阪府北部の中核市である高槻市の西部に位置し，2つの小学校と１つの中学校で構成される児童生徒数1,113人(富田小200人・赤大路小547人・第四中366人)の校区である。校区にはJRと私鉄の駅があり，近年JR駅前のマンション開発が進む。また，公共施設や市営住宅が点在するとともに歴史ある寺社等古い町並みを残しており，地域と連携した取組が進められている。

市施策により平成28年度から全中学校区にて小中一貫教育(施設分離型)を推進している。

【キャリア教育の目標】

今の課題に向き合い，未来をよりよく生きる力を育てる
～「社会参画力」を育む授業づくりを校区一貫して進める～

児童が,「学び」の必要性や学習意欲を見いだせずにいる状態を「学びの空洞化」と表し，児童の「学び」を実社会や将来とつなげ，主体的なものとするために「社会参画力」を育むことを目標とする取組を展開している。

【児童の実態把握】

・教職員による共有

毎年，校区の教職員で小中９学年の取組を振り返って交流し，児童の実態について話し合う機会を設け，成果と課題を共有している。別表「社会参画力ステップ表」については，児童の実態から作成しているが，作成当初より，実態に応じて見直しを続けている。

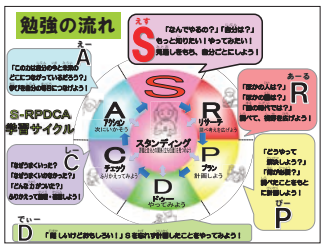
・校区効果測定アンケート

取組の成果と課題を検証するために，平成25年度より，４年生から９年生までの全ての児童を対象として，校区効果測定アンケートを実施している。校区が育成を目標としている「社会参画力」に関連した項目を平成28年度に追加するなど，改善を図りながら,「確かな学力」「豊かな人間性」「健やかな体」「信頼される学校・校区」の四つの観点による56項目で実施し，児童の実態把握及び校区の取組の点検・評価・改善(PDCA)に生かしている。

これら児童の事態から，付けたい力を確認し，付けたい力を育むための学習や取組についても，毎年見直しを行っている。

【とてもそう思う＋そう思う】

番号	アンケート項目	2019年11月	2020年10月	差（ポイント）
6	わからないことがあるとどのように調べたらよいかわかる	77.70%	82.30%	4.6
13	自分を大切にできる	81.10%	84.00%	2.9
44	学んだことを自分の生活で活かすことができる	73.60%	77.00%	3.4
47	人の話をしっかりと聴くことができる	80.30%	85.00%	4.7
55	周りの人と協力することができる	86.80%	89.90%	3.1



【つけたい力の設定】

校区で育みたい力として「社会参画力」を捉え，９年間を通して学力を高めていけるよう，付けたい力を細かく設定するとともに，児童が発達段階に応じて，安心して学べるよう学び方についても共有している。

今の課題に向き合い、未来をよりよく生きる力を育てる

			ステップ1	ステップ2	ステップ3
未来の自分に向かって歩もうとする力	自己理解力	自己決定力	自分で決めて行動しようとする	状況を踏まえて、自分で決めて行動しようとする	状況に流されず、自分で決めて行動しようとする
		意欲力	物事に楽しんで取り組もうとする	難しそうなことでも取り組もうとする	自分のできることを見つけて取り組もうとする
		継続力	うまくいかない時でも、投げ出さずに取り組む	困難にあっても、最後まであきらめずに取り組み続ける	解決が困難だと思われることに対しても、乗り越えようとねばり強く取り組み続ける
未来のやりたいを実現する力	課題解決力	課題解決力	自分が何をすべきか理解できる	課題を解決するための方法を考える	よりよい課題解決の方法を選択できる
		計画力	計画にそって取り組む	よりよい解決のために計画的に取り組む	より効率的に課題解決に取り組む
		振り返り力	取り組んだことをふり返る	取り組んだことをふり返り、学びを整理する	学んだことやわかったことを検証し、言語化する
人や社会と関わる力	相手理解力	相手理解力	相手を意識して、聴いたり話したりする	ちがう意見の人の考えを大切にして、聴いたり話したりする	多様な立場や考えを尊重して、聴いたり伝えたりする
		協働力	友だちと力を合わせて取り組む	自分の周りにいるいろいろな人と協力する	自分の関わる社会の範囲を広げ、さまざまな人と協働する
		伝達力	自分の考えや学んだことを、ていねいに伝える	自分の考えや学んだことを、わかりやすくよりよい方法で発信する	自分の考えや学んだことを、適切で効果的な方法を用いて発信する
社会参画力		参画力	取り組んだことの意味を感じられる	取り組んだことを自分の生活にいかす	取り組んだことの価値を感じ、自分たちの「みらい」にいかす

【校区連携による取組事例】

・ゆめみらいパスポート(「キャリア・パスポート」)

校区では，児童の学びの軌跡を刻むものとして，実施している。 児童が「こんな自分になりたい」「こんな生き方がしたい」となりたい自分を描き，「そのために今，何ができるのか」等，今が未来につながっていることを実感し，生き方につなげられるような活用を目指している。校区共通のワークシートと各学年での学びをクリアファイルに整理し，９年間の学びを積み重ねていく。

・ゆめみらい学園児童生徒議会

富田小学校，赤大路小学校の児童会と第四中学校の生徒会が集まり，校区にどのような「課題」があり，その「課題」に対してどのように活動を進めていくのかを協議し，具体的に実行している。感染症対策の観点から，集合開催が困難な時には，オンラインで開催した(写真)。

【地域の資源を活用したキャリア教育】

児童の「学び」を実社会や将来とつなげ，「社会参画力」を育成し，その力を発揮できる場面を設定するキャリア教育の実現に向けては，地域の資源を活用することが重要である。地域の願いや課題を聞き，よりよい社会づくりに参画する学習や校区にある商店街や公共施設等，校区の特色や資源を生かしたキャリア教育を実施している。

【取組を生み出す組織】

・研究推進事務局

校区の取組や連携の中心を担っているのが，ゆめみらい学園研究推進事務局である。各校の校長と連携推進担当の６人で組織している。各校の担当者が，校区でベクトルをそろえた取組を推進するために，校区の授業研究や研修の日程を調整したり内容を議論したりして，全教職員が集まる小中一貫研全体会の内容や各校における発信，児童や教職員の交流の機会を企画・運営している。以下は，校区が連携を深める上で大切にしていることである。

・教職員が各校の児童を「校区の子供」として捉え，育ちをつないでいること
・小中９年間で「校区の子供」の学びを積み重ねていること
・「チームゆめみらい学園」として，互いに教職員の高め合いが行われていること
・小小間，小中間でスムーズな連携・連絡があること

【事例4】宮城県仙台市立錦ヶ丘小学校
ICT 環境を活用した取組

【校区について】
　仙台市の西部，丘陵の斜面に造成された新興住宅地に位置する学校である。平成27年４月に，仙台市127番目の小学校として開校した。開校から７年目を迎える令和３年度は，児童数が1,050名を超えている。地域住民は，宅地分譲の直後からの住民に加え，全国各地から新しく移り住んできた人々で構成されており，教育に関する関心は高い。開校以来，ICTを活用した教育を推進し，視聴覚教育・放送教育の全国大会，自主公開研究会などにおいて，その成果を公開してきた。

【キャリア教育の目標】

自分のよさを理解し，望ましい人間関係をつくる

　学校教育全体で育みたい資質・能力を「【対話】＝温かいコミュニケーションができる力」と設定し，その素地となるものとして「異質なものとの出会いを楽しむ(好奇心や他者理解を含む)」「見方の多様さに気付く」「自分の問題として考える」の３点を大切にしている。キャリア教育においても，自己理解や他者理解を深めながら，望ましい人間関係を構築できるような取組の充実を図っている。

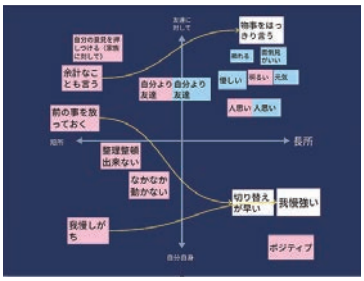
【児童の実態把握】
　本実践事例の対象は，第６学年の男子15名，女子18名，計33名の学級である。友達と関わることが好きな児童が多く，友達を理解しようとしたり，よいところを見付けようとしたりする姿が見られる。一方で，自己表現が苦手な児童が多く，日常生活において，「どうせ～だし」「～が苦手」「間違えたらどうしよう」など，否定的な言葉をつぶやくことが少なくない。自分の長所(よさ)よりも自分の短所(課題)を強く意識する傾向が強く，自信をもって前向きに生活しきれていないことが課題となっている。

【付けたい力の設定】
　仙台市では，キャリア教育において付けたい力を「うごく力」「みつめる力」「かかわる力」「みとおす力」「いかす力」の５つの視点から設定している。本校では，児童の実態を踏まえ，「みつめる力」に焦点化し，その素地となるような「自分を見つめる(自分らしさに気付く)」ことができるような授業づくりを進めている。
　本実践においては，目標達成に向け，自分の短所を友達と一緒にリフレーミングする活動に取り組む。「友達」との関わり合いを通して，自分では短所と思っていることでも，他の人の視点からは「長所」と見える可能性があることに気付くことができるようにする。短所と向き合い，前向きに捉えたり，改善したり，新たな長所を発見していくことで，一人一人が成長するきっかけとしたい。

【ICT活用のねらい】

ICTの特徴の１つである「可視化や共有の容易さ」を生かして，自身の考えの変化や一人一人の考えの違い，多様さを確認しながら授業を進めたい。一人一人の考えが「見える」ようになると，それだけで自分の思いを語りやすくなり，相手の考えを尋ねてみたくなる。また，電子化された思考ツールを活用すれば，視点を変えながら自分の考えを整理したり，自他の考えの変容を確認したりすることも容易になる。

さらに，自他の考えをICTによって一覧できるようにすることで，考えの異同を確認しやすくし，考えを広げたり，深めたりするきっかけをつかませたい。



【実践事例】

○ 事前の活動（日常的な活動）

・定期的に友達の「よいところ探し」を行い，教室に掲示して共有する。

・自分の長所や短所を感じたときに，「マイノート」にメモしておく。

・「マイノート」に書き留めておいた自分の長所と短所を，授業支援アプリ内の思考ツール「座標軸」上に配置する。その際，自分で発見した長所や短所は赤色のカード，友達が発見した長所は青色のカードと色を分けておく。座標軸は，横軸を「長所」と「短所」，縦軸を「友達に対して」と「自分自身」とし，自分の状態を視覚的に捉え，改善・解決を優先的に考えなければいけない短所に目が向くようにする。

○ 本時の授業

1　学級目標「個性を最大限に発揮し合えるクラスづくり」の実現に向け，自分の長所・短所を振り返る。（事前に座標軸で整理）

・自分が短所と感じていることも，友達から見ると長所となっている場合があることに気付くことができるようにする。

・視点や捉え方を変えることで，短所が長所になり得ることを確認し，学習の課題を提示する。

2　本時の学習の課題を知る。

短所をリフレーミングして，自分らしさを発見しよう。

3　「リフレーミング」の意味を確認し，練習を通してリフレーミングの「こつ」を知る。

・担任の短所として「おしゃべり」を例示し，どのようにリフレーミングできるか考えることができるようにする。

・次の２点に着目し，リフレーミングしてみると，「おしゃべり」を「知識が豊富である」や「周りを明るくできる」と捉え直すことができることを理解できるようにする。

① なぜおしゃべりなのか（理由から考える）

② 日頃どのような様子でおしゃべりをしているのか（様子から考える）

4　３人１組の班活動でリフレーミングを行う。

・１人３つの短所を取り上げ，どのようにリフレーミングできるか話し合う。

・短所に共感し合ったり，長所になり得る事柄を認め合ったりしながら取り組むことができるようにする。

5　自分の短所と向き合う。

・リフレーミングした結果をカード(白色)に書き，位置を考えながら座標軸に配置する。

・授業支援ソフト上で，リフレーミング前後の語句を結び付け，変容を視覚的に捉えることができるようにする。

・リフレーミングのための話合いを進める中で，自分の長所や短所の捉え方が変わった場合は，カードの位置を変えるようにする。

・短所がどのような言葉に置きかわったのか，長所に変わった言葉が座標軸上のどこに位置しているのかをよく見て，自分の長所や短所を見つめ直すことができるようにする。

・授業支援ソフトで，他者の座標軸も一覧し，気付いたことを話し合う。

・同じような短所でもリフレーミングの仕方が人によって違っていたり，同じような長所・短所の座標軸上の位置が違っていたりすることに気付くことができるようにする。

6　学級目標と個性の生かし方について話し合う。

・学級目標「個性を最大限に発揮し合えるクラスづくり」に立ち返り，目標達成のために注目すべきところは，座標軸上のどこなのかを話し合う。

・座標軸「友達に対して」の「短所」を「長所」と捉え直すことができれば，個性を発揮しながらクラスづくりに貢献できることに気付かせる。

7　授業を振り返り，気付いたこと，感じたことを話し合う。

・リフレーミングをしてみたことが自分自身についての新しい発見につながったか，学級目標の達成に向けて自分がやるべきことが見えてきたかといった観点で，感想を述べ合うことができるようにする。

・新たに見付けた自分の個性や友達の個性を大切にして，学校生活を送っていきたいという気持ちを高めることができるようにする。